

With コロナ社会における建築まちづくり

—コロナ災害復興フェーズフリーデザイン—



建築まちづくり委員会
委員長
連 健夫

With コロナ社会における建築やまちづくりへの影響は、人が集まって話し合うことが難しくなることである。しかし、オンラインミーティングが一般化する中で、意外と便利であり、遠隔地でも参加できる良さも浮き彫りになってきた。またグループワークも簡単にできるので、ワークショップなどで重宝する。もちろんオンラインに縁遠い参加者にはリアルが大切なので、オンラインとの併用、つまり「ハイブリッドな対応」と「ハイブリッドな思考」が大切になってくる。

建築での変化

テレワークなど働き方の多様化により、オフィスもフレキシブルな働き方を許容する形に変わってきている。従来の島型の机配置が、フリーアドレスの机となり、好きな場所で仕事ができるようになる。これに必要なのは、個別ワークができる個別ブース、ミーティングができる会議室などである。また創造的機会の意味合いで、ラウンジなどゆとりの場が重宝される。つまり、従来よりもさらに快適なデザインが求められるのである。

このフリーアドレスはシェアオフィスにも用いられており、それを借りる需要も増えることが予想されている。住宅では、家族にディスターブされないテレワークの場が必要となり、ある意味、住宅が一部事務所化すると考えられる。また家に居る時間が増えるため、より気持ちの良い空間デザインが求められることになる。

まちづくりでの変化

コロナ禍で浜松市の「まちなかオープンテラス」は興味深い。三密を避けるべく公共空間である歩道を店舗の一部として使う社会実験である。国交省は4年前に「道を活用した地域活動の円滑のためのガイドライン」を作成、運用しているが、このコロナ禍の対応として、「新型コロナウイルス感染症の影響に対応するための沿道飲食店等の路上利用に伴う道路占有の取扱い」で、11月末までは道路使用料は取らないという思い切った時限措置を実施した。訪問し、ヒアリングした中で、参加募集期間の短さや2mの歩く場所の確保の難しさ等の課題は見られたが、オープンエアの空間利用の良さが感じられ、今

後増えてくることは間違いない。つまり公道の柔軟な使い方である。公開空地の利用とともに、今後のまちづくりにおける大きなテーマとなると思われる。これに大切なのは、行政と市民という二者の関係ではなく、第三者の専門家の関与である。双方の立場を理解した上で、良いものにすべくアイデアをブレンドするのである。

ファシリテーターとしての建築家

この第三者の専門家としてのファシリテーター（促進者、調整者）であるが、まちづくりの実際には、専門性を持った上でのファシリテーションが有効で、この点、建築家は馴染みやすい。ただ、まちづくりは住民が主体であり、ファシリテーターは黒子の役割を担うので、上から目線では決してうまくいかない。With コロナ社会における働き方の多様化や店舗の変化の話をした、これらはいくまで主体は利用者である。空間づくりと経済性とのバランスとなり、それを尊重した上での関与となる。つまり、それを支えるアドバイザーとしての役割が強くなり、プレイヤーの役割が少なくなることを認識すべきであろう。

コロナ災害復興フェーズフリーデザイン

コロナ禍は災害である。災害復興には時間がかかり、With コロナ社会におけるデザインを考えることになる。平常時でも災害時でも役に立つデザインをフェーズフリーデザインと言うが、With コロナ社会においてはフェーズフリーデザインがさらに求められよう。建物周りの外部空間はトリアージや災害物資の配給等に役に立つが、それを平常時におけるオープンエアの気持ちのよい場所にデザインすることは可能である。そのアイデアとデザインを利用者との協働の中で実現するためには、やはりファシリテーションが必要になるのである。



浜松市「まちなかオープンテラス」の社会実験